

本市におけるOJT実践事例②（小学校）

校内研究を通して教員の授業力を高める

明野東小学校では、「どの子ども「わかる・できる」が実感できる指導のあり方～国語科「説明文教材」におけるユニバーサルデザインの授業づくりを通して～」を研究主題として校内研究に取り組んでいる。昨年度は、道徳科におけるユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりについて取り組んできた。今年度は国語科の「書く力」の育成に焦点を当て研究を進めている。また、校内研修については、「まなび部」「こころ部」「すこやか部」の三つの部会を中心に組織的に進めている。

11月15日（水）の校内研究では、4年「中心となる語や文を見つけて要約し、調べたいことを書こう（教材「伝統工芸のよさを伝えよう）」の授業を通して、「書く力」を高める授業づくりについて教員同士の学びを深めている。

○提案授業

本時は、単元において15時間中9時間目の授業である。伝統工芸の魅力が伝わる例を、思考ツールを活用して考えを書くことをねらいとして授業が進められた。導入では、前時までに自分が伝えたい伝統工芸の魅力とその理由を二つ思考ツール「フィッシュボーン」に書いたことを振り返り、教師が作成した思考ツールの「エラーモデル」から困りを見だし、本時の課題「自分が伝えたい魅力が、先生たちにより伝わるリーフレットにするには、どんな例を選べばいいのかな」を提示した。

展開では、自分の考えと考えを支える理由や事例との関係を考えながら見直す視点を共有したのち、自分が書いた内容を見直し、グループでよいところやアドバイスを伝え合う活動を仕組んだ。

終末では、本時のめあてを振り返り、「魅力にあった例を選んだり、詳しい例を書いたりすれば、読む人に魅力がより伝わるリーフレットになる」とまとめ、本時の振り返りを行った。

○参観者の様子

グループ活動があったことから、活動が進むと思われるグループとそうでないグループを事前に全教員で共有し、児童の言動を見取っていた。また、事後研究会の討議の二つの視点に基づいて、手立ての有効性等について記録をしていた。



○事後研究会のはじめに子どもの様子を全体共有

事後研究会は、右に示している流れで進められた。はじめに、各グループの児童の記録をした教員から児童の様子が詳細に語られた。「1行しか書けていないAさんにBさんが声掛けをしていた」「Cさんは教育用タブレット端末を見せながらDさんに例を示していた」「Eグループは個人で作業を進めていた」など、児童の様子を全体共有した。

児童の様子を踏まえ、授業者から「グループではどのような意見交流をしているのか分からなかったから、皆さんの児童観察でよく分かった。児童の振り返りには「いいことが書けているねと言われてうれしかった」と記述していた。「書くこと」の授業研究で、児童が書いていることを見てもらうのはハードルが高かった」等の授業での子どもの様子の振り返りと、二つのグループ討議の視点からの振り返りが行われた。

明野東小学校では、はじめに子どもの様子から授業を振り返るスタイルが確立している。

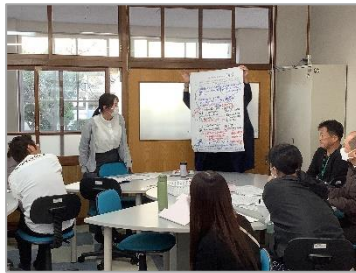
- 1 校長から
- 2 事後研究会
 - (1) 授業記録
 - (2) 授業者から
 - (3) グループ討議
 - (4) 発表
 - (5) 授業者から
- 3 指導・講評

○若手、ベテランが意見を出し合えるグループ討議

低学年部、中学年部、高学年部に分かれてグループ討議を行った。グループ討議では、「まなび部」の教員が進行を務め、高学年部5名のグループでは、若手教員が二つの討議の視点に沿って進めていた。グループ討議中は、会話が途切れることなく、「文を推敲する授業で、子ども同士がどのようにアドバイスすればよいか分からない」と日常の授業からの疑問が発言されたときに、「途中で「こんな話をしているよ」と中間評価をするとよい」と若手教員からアドバイスが出ることもあった。さらに、「6年ではパンフレットをつくる。見出しをつくるために思考ツールをどのように活用するか」など、国語科の指導事項の系統性を踏まえた意見が出されていた。

グループ討議後は、グループ発表を行い、出された意見を全体共有していた。発表された意見を踏まえ、授業者から二つの討議視点についての考察が述べられた。

グループ討議については、校内研究で繰り返し行っていることから、戸惑うことなく全教員がスムーズに進めることができている。研究主任の全体進行、時間設定など、教員の実態に応じて柔軟に対応していた。



【若手教員の声】

校内研究を通して、ベテラン教員でも「ああでもない、こうでもない」と授業づくりについて悩むものであることを知った。校内研究では、改善策がたくさん出され、教員は終わりのない仕事だと感じる。一つのことを真剣に考える、熱中できるのが教員であり、他の職種にはないよさがある。

今回の提案授業を見て、発問の仕方や子どもが考える視点のもたせ方などが勉強になった。

(初任者)

【研究主任の声】

明野東小学校では、4年前からユニバーサルデザインの視点（焦点化、視覚化、共有化）を基に、子どもに付けたい力を明確にして校内研究に取り組んでいる。

今回の提案授業までに、全体で3回、4年から6年までの高学年部で3回、学年部で何度も学習指導案審議を積み重ねてきた。自分が時間設定し、時間が超過しそうときには次回というように、時間厳守で行っている。

事後研究会では、「分からなかった」という発言は避け、討議の視点を二つ示し、誰もが話せるようにしている。また、「付けたい力は何か、子どもの最後のゴールの姿はどのような姿か、そのために何をするのか」を事前に全教員に説明している。

若手教員には、提案授業や互見授業において、ベテラン教員の授業を見て、指導技術だけでなく、間合い、表情を学んでほしい。また、授業について、たくさん考えて、実践して、失敗して…を繰り返し、授業力を高めてほしい。また、提案授業を積極的に引き受け授業構想や授業展開について学んでほしい。

明野東小学校の校内研究は、子どもの姿から授業を語り、教員同士の学びが深まるとともに、「授業力を高めたい」という各教員の意欲の高さが感じられるものであった。

授業研究は、授業者にとっては省察の場となるが、授業者以外の教員にとって個々の学びがあるかが大切である。事後研究会では、提案授業に関する協議後に、提案授業を見て明日からの授業に何が生かせるかなど、自己の授業を振り返る時間を設定している学校もある。このような取組により、個々の学びが深まり、授業改善につながるのではないかとと思われる。